

2022年4月24日・佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書6章14～29節

説教題：良く生きるために

聖書に「人を恐れると罾にかかる」(箴言 29:25)とあります。私は、婚約式の時のことを思い出します。色々な方が結婚に関わって下さっていたことがあって、私は非常に緊張していました。そして人を恐れました。母に対しては甘えがあって「こういうものを用意して欲しい」と思いました。ところが、母には母の考えがあって、私が思っているようにはしてくれませんでした。「恐れは人を責めさせます」。私は母を責めました。婚約式を見栄え良くしようとして、母を責めました。次の日、牧師の司式でキリスト教式の婚約式を行いました。讃美歌を歌い、神の前に約束を結びました。参加された方々の目には、体裁が整っていたのかも知れません。しかしそこには、私の言葉で傷ついた父と母がいました。そしてその全てを、神が見ておられたのです。「出エジプト記」に「自分の父または母をのろう者は、必ず殺されなければならない」(出エジプト 21:17)とあります。神様にも母にも、赦して頂くしかないので、神の御心を思うなら、母に対して別の対応があったのです。情けない失敗談ですが、今朝の箇所に登場するヘロデのことを思う時、大きな失敗をした自分の過去を思い出すのです。

聖書の学びに入ります。「内容」と「メッセージ」、2つをお話しします。

## 1. 内容～ヘロデの失敗

バプテスマのヨハネという人はイエス様の先駆者として活動した人ですが、ヨハネが活動した地域—(ペレヤ)—を治めていたのはヘロデ・アンティパスという王様でした。妻のヘロデヤは、もともとヘロデ・アンティパスの異母兄弟ヘロデ・ピリポの妻でした。ところがアンティパスがローマのピリポの許を訪れた時、ピリポの妻であったヘロデヤをみそめて、自分の妻になるように説得したのです。ヘロデヤの同意を取り付けたアンティパスは、すぐに自分の妻を追い出して、ヘロデヤを妻として迎えました。兄弟の妻を横取りしたのです。それは道徳的にも問題ですが、何より神の律法に違反することでした。バプテスマのヨハネは、ユダヤ人の国を治める支配者が公然と律法を破っているを見逃すことが出来ませんでした。18節にあるように、ヘロデ・アンティパスの支配地でヘロデを非難する言葉を叫んだのです。それでヘロデは、ヨハネを捕らえ、死海の東岸にあったマケルス要塞に幽閉してしまうのです。しかしヘロデは、ヨハネを幽閉しながら、手を出すことは出来ませんでした。ヨハネが民衆に人気があったからです。ヨハネを殺して、民衆に暴動でも起こされてはたまらない。それだけでなく 20節にはこうあります。「ヘロデが、ヨハネを正しい聖なる人と知って、彼を恐れ、保護を加えていた…また…ヨハネの教えを聞くとき、非常に当惑しながらも、喜んで耳を傾けていた」(20)。ヘロデは、一方でヨハネを憎みながら、一方で「悔い改め」を求めるヨハネの言葉を喜んで聞いていたというのです。ヨハネの言葉はヘロデにとって、彼を神と結びつけてくれる何かを感じさせたのかも知れません。ヘロデに関する限りヨハネに対する思いは複雑でした。

しかしヘロデヤにとっては、そうではなかった。彼女は自分達の罪を責めるヨハネが疎ましかったのです。ヘロデ家の歴史というのは「近親相姦と殺人の歴史」です。彼女もヘロデ家の人間です。そういう環境で育ちました。だから殺すということに対して抵抗はなかったのかも知れません。「邪魔者を葬り去りたい」と願っていた、そんな時、絶好の機会が来たのです。ヘロデの誕生日、娘のサロメが皆の前で踊りを踊りました。その踊りを喜んだヘロデは、軽率な約束をしてしまいます。ヘロデヤは、その約束に乗じてまんまとヨハネを殺させてしまうのです。

## 2. メッセージ

この箇所は、何を語るのでしょうか。2つのことを教えられます。

### 1) 神の言葉を殺さない

16節でアンティパスは「ヘロデはうわさを聞いて、『私が首をはねたあのヨハネが生き返ったのだ』と言っていた」(16)とあります。恐れます。なぜイエスの噂を聞いた時に、ヘロデは「ヨハネが甦ったのだ」と思ったのでしょうか。彼は、ヨハネを殺してしまったことに責めを感じ、恐れを覚えていたのだと思います。ヘロデは、ヨハネを黙らせよう、殺してしまおうとしました。しかし捕えられたヨハネは、今度は牢の中でヘロデに「罪の悔い改め」を説いたのです。それもヘロデへの愛を持って説いたのではないかと思います。だから「ヘロデ(は)…ヨハネの教えを聞くとき…当惑しながらも、喜んで耳を傾けていた」(20)のです。しかしそのヘロデが結果的にヨハネを殺してしまいました。そこに、ヘロデの支配地—(足元)—にイエスが登場して伝道を始めました。ヘロデがイエス様の中に「ヨハネの甦り」を感じたのは、イエス様がヨハネと同じ言葉を語られたからです。「神を無視する生き方を悔い改めて、神に立ち帰りなさい」。しかしヘロデは、イエスをも殺そうとします。ヨハネは、ヘロデに神の言葉—(神の求め)—を語りました。しかしヘロデは、ヨハネを殺すことで神の言葉が聞こえないようにしました。ある説教者が言いました。「それは神の言葉を殺したということだ」。私もその言葉を使わせて頂きます。ヨハネの後を継いで、イエス様も神の言葉を語られた。ヘロデは、イエス様をも殺そうとしました。それも神の言葉を殺そうとしたということです。しかし、ヘロデは—(世の悪は)—神の言葉を殺そうしましたが、神の言葉は、ヨハネからイエスへ引き継がれ、ヘロデに働くのです。そしてイエスが昇天されると、神の言葉は、イエスの弟子達へと引き継がれ、語られて行くのです。弟子達も迫害されます。しかし次々と引き継がれ、語られるのです。神の言葉は、神の摂理の御手に守られて、生き続け、人に働き続けるのです。神の言葉は滅びない。ヘブル語では、「言葉」は「事実」とも訳されます。神の言葉は働いて、御言葉の通り事実となって行くのです。そのような言葉だから、私達は神の言葉を信頼し、すがり付いて良いのです。

この箇所は、ヨハネ殉教の記録を弟子達の宣教の働きの間—(12～13節と30節の間)—に挟むことによって、神の言葉を迫害しようとする悪の力があることを語りながら、しかし、神の言葉は力強く語り継がれて行く、神の言葉の力、勝利、そのようなことを語ろうとしていると思います。

しかし、それだけではありません。この福音書が書かれた頃の教会には、十字架の時には「十字架につけろ」と叫んだ人々、そこから悔い改めて教会に加わった人々もいたのです。弟子達もイエスの十字架の時には、イエスを裏切って、イエスを見捨てて逃げました。つまり「マルコ福音書」が書かれた時代の教会の人達は、自分達も神の言葉を語る人—(神の言葉を)—を見捨てた、殺そうとした、そういう悔い改めの中にあっただろうと思います。いや過去のことではなく、今の自分達がまた「神の言葉を殺そうとする思いと闘う日々を生きている」ことを思わざるを得なかったのではないのでしょうか。神の言葉を殺すとは、それは迫害に屈して、信仰を捨てるということもあっただしょう。しかしそれ以上に、心の中で神の言葉を否定すること、蔑ろにすること、神の言葉に生きないこと、そのようなことにおいて神の言葉を殺そうとする、そういう思いに対する信仰の戦いがあったのではないかと思います。

その意味でこの箇所は、私達に語りかけるのです。「あなたは神の言葉を殺そうとしていないか」。私達は、命の危険を感じるような迫害で神の言葉を捨てる、信仰を捨てる、ということはないかも知れません。しかし、色々な問題や悩みの中で、問題に目を奪われて、神の言葉を殺してしまうということがあるのではないのでしょうか。試練の中で、神の言葉を無視することによって、神の言葉を信じないことによって、神の言葉を殺していないか。それが問われるように思います。

ある時、私は思い煩うことがあって、ボーッとして溜息をついたのです。そうしたら家内が言いました。「聖書に『思い煩いを…神にゆだねなさい』(1ペテロ5:7)という言葉があるでしょう。あの御

言葉はどうなったの。「ああ。神の言葉を殺していた」と思いました。喜んで聞いていた言葉です。しかし、現実の悩みの中で神の言葉を殺している、窒息させていることが多いのです。以前「百万人の福音」である牧師のお証しを読みましたが、若くしてガンで亡くなった息子さんの話が今でも心に迫って来ます。息子さんは、亡くなる前、闘病の苦しみの中で、彼の奥さんに言うのです。「聖書に『神のなさることは、すべて時にかなって美しい』(伝道者の書 3:11)とあるように…(たとえ)癒されなかったとしても、それも美しいこと、良いこととして喜ぶんだよ」。奥さんが「私は喜べるよ」と答えると、彼は嬉しそうに輝いた顔をしたと言うのです。「神のなさることは、すべて時にかなって美しい」。私も大好きな言葉です。しかし私は、悩みに心奪われ、この言葉を殺してしまうことが多いのです。「神のなさることは、すべて時にかなって美しい」、この言葉を噛みしめると「私の信じる神は、時に適って麗しいことをされる神なのだ」と心動かされます。同時に「あなたは私を信頼するのか」、そう語りかけられるような気もします。

私達は迫害の時代にはいない。しかし、何度も紹介していますが、この教会にも来て下さった森繁さんのお証を思います。彼が佐渡島に行って、そこで切支丹殉教の碑を見るのです。彼はその碑文を見ながら思うのです。「私がこの時代に生きていたら、信仰を守って殉教出来ただろうか。それとも信仰を捨ててしまったらろうか」。その時、彼の心に響く神の細い御声がありました。「私はお前をあの時代に生まれさせていない。今の時代に生まれさせたのだ」。彼はその御声に向かって言いました。「それは不公平じゃないですか。あの頃の人命を賭けました。私は命を賭けていません」。そうしたら、また御声が聞こえました。「私に従って来るのは、あの時も今も同じだけ難しいのだ。私に信頼する人だけが出来るのだ」。その時、彼は、普段の生活の中で神の言葉に生きていない自分の姿を思い、神の御声に納得するのです。私達は迫害の時代ではなく、今の時代に置かれています。この時代に精一杯の信仰生活をするように招かれている。確かに私達には色々な悩みがあります。しかしパウロは言います。「あなた方の会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなた方を、耐えられないほどの試練に合わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えて下さいます」(1 コリント 10:13)。この言葉の本来の文脈は「たとえ苦しみに遭ったとしても、信仰を持って歩み続ける時に、神が必ず脱出の道を備えて下さる」というものです。御言葉を握って、希望を持って歩み続けるところに、必ず答はある。問題はあります。しかしその中で、神の言葉を殺さないように、信仰を働かせ、精一杯、神の言葉に生きて行きたいと思えます。神が顧みて下さるに違いないのです。

## 2) 神を畏れる

この箇所からもう 1 つ教えられることは「神を畏れる」ということです。ヘロデは神の言葉を殺そうとしましたが、もう 1 つ、ヘロデの姿に気づかされるのは…。並行箇所「マタイ 14 章 5 節」に「ヘロデはヨハネを殺したかったが、群衆を恐れた」(マタイ 14:5)とあります。人を恐れしました。またこの 26 節には「王は非常に心を痛めたが、自分の誓いもあり、列席の人々の手前もあって、少女の願いを退けることを好まなかった」(26)とあります。列席の人々の評判を恐れたのです。しかしヘロデも、ただ鈍感で冷酷で好き勝手なことをやるだけの暴君ではなかったのです。ヨハネの言葉の中に真実を嗅ぎ取っていたのです。しかし、結果としてヨハネを殺してしまい、自分のしたこと責めを感じ、恐れを感じなければならなくなったのです。申し上げたように、彼は、そこにいる人々の手前、自分の軽率な誓いを翻すことが出来なかったのです。彼が心を痛めたのは、ある意味で「それは神の御心の適わないぞ」という神からの警告だったと思うのです。しかし彼は、その声を押し殺します。神を畏れるより、人を恐れるのです。人々の評判を選ぶのです。人を恐れて畏にかかったのです。

「マルコ福音書」は、ヘロデの姿を通して、私達に「あなたは神を畏れるより、人を恐れていない

か」と問いかけるのではないのでしょうか。私達はどうでしょうか。ある人が言いました。「日本人は、人の目を気にして、人の口を気にして生きるように育てられる」。私自身も「人に笑われないように、人並みにするように」と言われて育ったように思います。その意味で日本人の根本のところは—(言い過ぎかも知れませんが)—一人が神になっているようなところがあるのではないのでしょうか—(日本教です)。確かに人への恐れの方が、切実な感じがします。私も人を恐れます。しかし、人がどう思うか、どう評価するか、そればかりを気にする生き方は、窮屈です。何よりヘロデの姿が教えるように、もし私達が、神を畏れることを退け、人を恐れることを選ぶならば、それによって、生きるべき生き方が出来ない、大事なものを見失う、ということがあるのではないのでしょうか。

「鼻が低いことを悩んで死のうとした人」の話を知っています。昔の話です。その人は小学校を卒業するとすぐ新潟から上京して、上野の飾り職人の家に奉公に入りました。毎日毎日、磨いている銀細工に自分の顔が映りますが、とにかく鼻が低い。同僚が「お前は良いな、雨が降っても雨が鼻に当たらないだろう、ころんでも鼻をすりむくことはないだろう」と囃し立てますが、返す言葉がありません。そこで彼はもう生きていく気がなくなって、悩みに悩んだ末に死ぬことにしました。死ぬつもりである晩、上野のお山の墓地に行き、墓石に腰をおろして「ああ、これで最後か」と悲しんでいました。すると西郷さんの銅像の方向から「ドーン、ドーン」という太鼓の音と「ただ信じよ…信じる者は皆救われん」という讚美歌の歌声が聞こえてきました。「死ぬ前に一回くらい耶蘇教の話聞いてみるのも悪くないだろう」、そう思って行ってみると救世軍(キリスト教の一派)の人々の説教があったのです。その説教に聞き入っているうちに、鼻が低いのを恥ずかしくて悩んだ自分が情けなくなって来ました。「恥ずかしいのは、悲しいのは、俺の鼻が低いことじゃない。神の前に心が罪に汚れていることだ」と分かったのです。それから彼は、信仰を持って、新しい歩みを始めたのです。神を畏れた。そうした時、人の評判は気にならなくなったのです。自由を手に入れたのです。

「人を恐れるとわなにかかる」。その罟から逃れる方法は、神を畏れることです。人は真に神を畏れる時、何が本当に大事なのか、判断出来るのではないのでしょうか。ヘロデは、反対の生き方をしました。彼には悔い改める機会があったのです。ヨハネは、何度も何度も悔い改めを語ったはずですが、ヘロデが悔い改めて、神を畏れることを選び取るなら、違う生き方があったはずなのです。しかし、最後まで悔い改めません。そのように生きて、最後は、気を遣っていたローマ皇帝から流罪に処せられて終わるのです。人は変わります。人の心も変わります。世の中の価値観も変わります。でも神は変わらない。神を正しく畏れることが、1回限りの人生をより良く、より自由に生きて行くために大切なことではないのでしょうか。それだけではなく、やがて全ての人は、神の前に立つ時が来るのです。神を正しく畏れる信仰生活でありたいと願うことです。